

## 顔

とんだ玉三郎

天現寺智美はスーパーマーケットの店長として働いている。最近、顔のことが気になってしかたがない。きっかけはトイレで偶然、耳にした若いパートさんの会話だった。用を足し終えると甲高い声のふたりが入ってきた。そのひとりが言った。

「店長、若作りしているけれど、あれで高校を卒業する年の子がいるのよ」

「そう、そんなに見えないわよね。まだ、三十才後半か、四十を少し超えたくらいだと思っていた。どうして、高校を卒業する子がいるって、知ってるの」

「私の妹、この春に高校を卒業したんだけど、同じクラスに天現寺という名字の子がいたっていうの。それで、天現寺って、名字が珍しいので私がパートに出てるスーパーの店長と同じ名前だ、って言ったたら、『関係あるのかなあ』というから、スーパーに入った時にもらったパンフレットにあった店長の写真を見せたの」

「すると、『そうそうこの人、卒業式に来ていた』というから、間違いないよ」

「でも、二十歳くらいで、生んだってこともあるから、そんなに年いってないのじゃない」

相手はすかさず反論した

「この前、お客さんに渡すお釣りを間違えて、店長にお説教をくらったことがあったの。その時近くで店長の顔ずっとみちやった。やはり、目の周りにシワがあるし、首なんかたるるんで。顔の筋肉もなんか、垂れ下がっているみたい」

智美は「お釣りを間違えて、説教したのはパートの星田さんだったわ。それにしても、そんなに人の顔のことを悪く言うことないでしょ」と腹が立った。

智美は顔に自信をもっている。化粧をし過ぎると返って早くふけると思っているの、化粧らしい化粧はしたことがない。肌には張りがあるし、シワもほとんどないと自信があった。今年、五十四才になったが、周りからは、『とても、年相応には見えない。まだ、三十代でも十分通用する』とよく言われる。それはお世辞でも嬉しかった。

ただ、トイレでの会話を耳にした後、自信がなくなった。スーパーマックス

トでは系列店の全店長を対象に、月に一度、定例会議が開かれる。以前は全員本社に集まって開催されていたが、コロナ禍以降、テレビ会議形式となり、自分の店からパソコンで参加する。発言者の顔が画面に大写しされる仕組みになっている。大写しされるのが嫌なので、智美は発言を控えていたが、本社の営業部長から、発言を促された。

「朝日が丘店の天現寺さん、発言がないようですが」

智美は言いたいこともあったが、映されるのが嫌でそっけなく答えた。

「今日は特に何もありません」

智美は、バツイチである。女子大を出てすぐにデパートに勤めた。そこで六才年上の男と知り合い、職場結婚した。恐らく年が離れていた智美を子供のように包容力を持って接してくれたので、そこに惹かれたのだろう。若くして父を亡くしたので父親の面影を見たのかもしれない。しかし、四年ほどで結婚生活は破局を迎えた。別れた原因は智美の不倫であった。幸いにふたりの間には子供はいなかった。

原因は確かに、智美の浮気であったが、もともと性格が合わなかったのだ、と智美は思っている。夫と離婚した後、気まづくなってデパートを辞めて、時間を少しおいてから、その不倫相手と結婚した。結婚後、少しして、子供が出来た。前の夫との間は欲しくても出来なかった子供がすぐ出来たのは意外でもあったが、思い当たる節もあった。

前の夫も子供を欲しがっていた。しかし、なかなか出来なかった。ある日、思い切って、夫に相談したことがあった。

「ねえ、貴方も子供欲しいでしょ。私、今度、お医者さんに行ってみてもらおうと思うの」

「そうだな、俺の親も早く、孫の顔が見たいと言っていたからね」

智美は産婦人科に行ってみてもらったが、異常はないと言われた。『今度はお主人と一緒に来てください』と言われ、夫にその事を告げた。すると、夫は、急に不機嫌になって言った。

「不妊の原因は女のほうに決まっている。原因は俺にあるはずがない。俺の兄貴だって、三人も子供がいるんだ。他の医者に診てもらえ」

これには失望した。その頃から、もうこの夫とは一緒にやっっていけないと思いはじめた。

そうこうしているうちに、デパートの陳列の様様替えのために出入りしていたインテリアデザイナーの天現寺と知り合った。彼は智美よりも三才、年下だった。インテリアデザイナーという職に似合わず、堅実そうな男であった。離婚後、天現寺と結婚して専業主婦になった。やがて、子供が出来たが、その子供に手がかからなくなったので、スーパーマーケットにパートとして勤めだした。デパートでの接客の経験が生きたのか、また元来、商売にむいていたのだろうか、パートから正社員に昇格し、その後、数年して系列店の一店舗の店長を任され、現在に至っている。

秋田健治は二年前から沢田美容整形クリニックで医院長を補佐する傍ら經理の仕事を手引き受けてやっている。大学を卒業してデパートに入社、經理畑一途に働いてきた。しかし、デパートは顧客離れで不況、いずれは倒産の憂き目にあうのではと思っていたが、案の定、停年を前にして肩たたきに合い、わずかながらの退職金を受け取って退職した。經理の道を生かす仕事がないかと、求人サイトを探していると、ある小さな美容整形クリニックで医院長を補佐する經理経験のある人材を求めているとの情報を得て応募した。幸い、まだ六十に達してなかったこともあり、運よく採用され、現在に至っている。デパート時代に職場結婚をしたが、妻の浮気が原因で離婚、その後は再婚もせず、独身を通している。

沢田美容整形クリニックの医院長の沢田司は二年前に美容外科医として勤めていた大手の美容整形クリニックを退社して、独立して沢田美容整形クリニックを立ち上げた。資金は循環器系クリニックを開業している父親に出してもらった。インターンを終えて美容外科を目指すと言った時の父とのやり取りを思い出す。

「せっかく、二浪までさせて高い私立の医学部に入れてやったのになんでよりによって美容外科なんか選んだんだ。俺の後は美雪に継がせるしかない。幸い、美雪はお前より優秀で国立の医学部に入ったからよかったようなもの。やはり、俺は思う。女の顔をいじるなんてまともな医者のことではない、お前、妹に一生頭があららないぞ」

「美容整形はこれからの花形だよ。それに第一仕事が楽だよ。夜勤も、救急患者もないよ。医者資格があれば誰でもなれるし、就職すれば新入りでも、年収二千万は下らないらしいよ。腕が上がり、評判がよければ四く五千万も夢で

はないっていうし」

「でも、どう見ても、内科の俺のほうが上だよ。金に目がくらんだのか」

沢田は、「何、言ってるんだ。親父だってリフィル処方箋を受け付けないだろう。それこそ、金に目がくらんでいる」と言いたかったが、いずれ、開業する気だったので、その時には資金を出してもらわないといけないので、口答えはしなかった。リフィル処方箋とは、定期的に薬だけを貰いに来る患者に対して、医者 of 所に来ずに薬局に行つて薬だけを受け取ることの出来る制度である。しかし、診察の機会の減る医者にとっては、再診料を取れないのでうまみが無い。制度としてあつても医者はなかなかリフィル処方箋を薦めない。患者も医者 of 嫌がるリフィル処方箋を選択して、なにか体調に異変があつた場合、見てもらえないのではと恐れて選択しない。多少、再診料を取られても、どうせ、保険でカバーされるのだからという意識があり、普及しない。日本の医療制度の問題点のひとつでもある。

「オヤジは時流というものが分かってないんだよ」と司は思った。

四十年くらい前までは、美容整形クリニックは映画スターやテレビタレントや一部の金持ちなどの特権階級だけが利用するものと思われてきた。しかし、だんだん普及してきたこと、業者が増えて、競争が激化して安価になつたこともあつて庶民も利用するようになった。業界の派手なPR合戦も功を奏した。特に、ブームの火付け役になつたのはコロナ禍のリモートワークだった。自宅や遠隔地から参加する者もテレビ会議で顔がスクリーンに大写しされる。しかも、パソコンの性能がよくなったので、顔のシワやシミもわかるようになった。それは自分の顔を他人と比較してまじまじと見る機会が増えることでもあつた。すると、それまで顔や若さに自信のあつた人は返つて不安になる。その結果、美容整形クリニックへ駆け込むことになる。

健治は、沢田美容整形クリニックの顧客リストに、天現寺という珍しい名前を発見した。とっさに、別れた妻の浮気相手の名字が天現寺であつたことを思い出した。浮気のことには屈辱的であるが、デパートに勤務している時に後輩が教えてくれたものである。その時の会話。後輩が言った。

「秋田さん、婦人服売り場の模様替えに、インテリアデザイナーの天現寺さんという人が出入りしているでしょう」

「俺は経理で売り場には出ないからよく分からないがどういふことだ」

「実は、奴、大学のサークルで一緒だったのでよく知っています。奴は芸術学部で学生時代、ちよつと変わった奴だと評判だったのですよ」

「それがどうかしたのか」

「いらぬおせつかいかもしれませんが、奥さん、確か、婦人服売り場の担当でしたよね」

「そうだが、それがどうしたんだ」

「奴、女に手が早いんですよ。さつそく、奥さんと親しそうに話をしてましたよ。気を付けたほうがいいですよ。秋田さんの奥さん、美人で若く見えますからね。奴は『ざんざん、遊んだあとに、一番いい女と一緒にいるんだ。人のものを盗むのも悪くない』と豪語してましたからね」

健治も、からかわれているのだろうと軽く受け流し、そんなに深く考えなかった。しかし、これまで定休日は家にいることの多かった妻が決まってどこかに出かけるようになった。それも、婦人服売り場から借用したのか、若作りの服を着て出かける。

そのうちに、やれ大学の同窓会旅行だ、友だちの結婚式だといって外泊することもしばしばあった。

天現寺と親しくなった智美は年上の夫と彼を気が付かないうちに絶えず比較していた。自分より六才上の夫、三才下の天現寺、ふたりの年の差は九才だが、それ以上に天現寺が若く見える。夫が経理という地味な仕事をしていて性格も地味なところがあるのに比較して職業柄、若々しい発想で、冗談も言うし、話もうまい。遊び慣れているだけかと思っていたが、それだけではないようだ。だんだんと惹かれるものがあった。

健治も後輩の忠告を軽く受け流すつもりであったが、定休日、うきうきして出かける妻を見ているとなんとか正体を突き止められないかと考えるようになった。興信所に依頼しようかとも考えたが、他人からみじめな結果を知らされるのもプライドが許さない。それで思いついたのは変装して外出した妻の後をつけることだった。定休日、この日は、「女子大の同窓会がある。遅くなれば友だちのマンションに泊まるかもしれない」と言い残して、四時過ぎに出掛けた。駅に向かって歩いていく妻を見届けた後、手早く変装してタクシーを拾って、先回りして駅につき、物陰に隠れて待った。惨めな思いがしたが我慢した。

電車が来たので妻の乗った車両の隣に乗った。ターミナル駅につくと見失わないように注意しながら後をつけた。やがて、駅前に出ると、ある喫茶店に入る。やや遅れて、入ると、奥の方に、天現寺と向かい合って座っている妻が目に入る。楽しそうにふたりで会話している。注文したコーヒーを飲み終わると、連れだつて店を出ていく。惨めな気持ちで後をつける。いつも使っているのだから、はじめから行先が決まっているように洒落たレストランに入る。ひとりで入るのも怪しがられると思って店の前で辛抱よく待つ。やがて食事を終えて出てきたふたりは、シティーホテルへと向かう。さすがに警戒しているのだから。周囲を見回すようにして、まず妻が天現寺を残してエレベータに乗り込む。エレベータの扉がしまるのを待って、天現寺がボタンを押す。エレベータが来ると、周囲を見回して乗り込む。エレベータに乗ったのは彼ひとりだ。ドアの前で見ていると、エレベータは十二階で停止する。十二階は客室だけだ。健治はこれで間違いないと確信したが、妻の浮気の現場を抑えるというのは惨めなものだ。特に、天現寺の持つ若さ、職業柄か、見に付けたセンスを自分と比較してしまう。経理という地味な仕事のためか彼と比べて華やかさに欠ける妻が疲れたと言つて同じベッドで寝ることを避けるようになってきた理由がわかるような気がする。

さて、正体を突き止めたが、これからどう対応すればいいのだろうかと思案し出した。面と向かって言つても白状しないだろうし、旅先でもないのにホテルの部屋に入るのは不自然だが、同じ部屋に入るのを見たわけでもない。泊まっている女友だちに用事があったので訪ねたなどの下手な言い訳も出来ないことはない。

案じることもなく、問題は思わぬ方法に進展した。健治が思い切つて、問いただすと妻は開き直つたのだつた。

「それで分かつたわ。貴方、この前、コスモポリタンホテルの前をうろついていたでしょう。ホテルの近くのコンビニに行った帰りに貴方によく似た人を見つけたのでおかしいなと思つたの。やはり貴方だったのね」

健治は思い出した。ホテルからの帰り、変装をしているのが馬鹿らしくなつて付け髭とメガネを外したのだつた。

「お前は、浮気をしているのを認めるのか」

「ばれたら仕方ないわね。浮気でなくて本気かもよ」

「お前、正気でそんなことを言っているのか」

年上であることを笠に着て高圧的なもの言いをするには結婚当初は返って頼りがいがあるように思えたが、だんだん鼻につくようになっていた。智美は思い切って言った。

「以前から思っていたんだけど、貴方はどうしていつも威張り腐ったような言い方をするの。私は貴方の稼ぎに縋っている専業主婦でもないわ。生計費は折半でしょ。そんな昭和のオヤジのような威圧的な言い方はむかつくだけだわ」

健治は反論しようとしたが、確かに一理あると思った。さらに、智美は続けた。

「貴方、覚えている？」

「なんのことだ」

「子供がなかなか出来なくて、貴方のお母さんから白い眼で見られていると感じていたから思い切って産婦人科の先生に見てもらったわ」

「ああ、そのことか」

「先生が今度はご主人と来て、っていったら、貴方、『ほかの病院に行ってみてもらえ』と言ったわ。不妊って、女だけの問題じゃないのよ。私、悲しくて、その晩、ベッドの中で一晩中、泣いたわ。その時に思ったのよ。私たちの結婚って何だったのだろうって。間違いだったってね」

健治はその夜のことを思い出した。やはり、妻の言う通りに、病院に行くべきだったと後悔してみたが、もう後の祭りだった。

「ちようど、いい機会だわ。私たち、別れましょう。お互いまだやり直せる年でしょ」

離婚は少し時間がかかったが、調停に入った弁護士の仕事もあって円満に成立した。その後、健治は風の便りで、妻が天現寺と結婚したことを聞いていた。

沢田美容整形クリニックの顧客リストにあった天現寺智美は元妻に間違いなと思った。それで、智美を担当している医師の幸田に訊いてみた。

「うちの顧客リストに天現寺さんという名があったが、どんな人なの」

「どうして、そんなことを訊くのですか」

「いや、天現寺という名字は珍しいだろう。僕の知り合いに、天現寺という名前の人がいるのでひよっとしたら、同じ人かもしれないと思って」

顧客の個人情報の開示してはいけないことになっている。しかし、このクリニックではその点、ルーズなところがあった。

「天現寺智美さんのことですか。カルテでは五十四才となっています。職業欄

にはオリンピックスーパーマーケットの朝日が丘店、店長とありますね。家族構成も書いてあります。旦那さんと娘さんの三人暮らしのようですね。天現寺さんは若々しくて肌にも艶があり、四十代前半と言っても十分、通用しそうですよ。ご存じの方にそういう人がいらっしゃるのですか」

健治は否定の答えをした。

「僕の知っている天現寺さんは、もっと年配の人だ、どうも人違いだったようだ。でも、そんな年よりずっと若く見える人でも治療に来るものなのかね。いったい、どんな治療をするんだ」

幸田は専門用語も交えながら、簡単に、説明を始めた。

「天現寺さんは糸によるフェイスリフトとヒアルロン酸の注射による小じわ取りを選択してますね」

年を取ると、顔の筋肉が全体的に重力で垂れ下がってくるので、それを持ち上げるために、皮膚の下に糸を入れて引き揚げ固定する。これがフェイスリフトと呼ばれている治療である。顔にシワの出来るのは筋肉の動きによるもので、筋肉の動きを弱めたり止めたりする作用のあるヒアルロン酸という薬を生理食塩水で薄めて、皮膚の下に注入するのである。しかし、ヒアルロン酸を多量に注射すると、顔の筋肉の動きが大きく阻害されるので、無表情になったり、笑っているつもりでも笑い顔が作れなくなるという危険もあった。健治もこれくらいの知識は門前の小僧で知っていた。

健治はマンションの誰もいない部屋に帰って考えた。離婚した時、四十才だった。結婚相談所で再婚相手をいろいろ探したが、四十代のバツイチというのは大きなハンデだった。離婚後は六十になるこの年までひとりだ。一方、妻は再婚後、子供も出来て、スーパーの店長までやっているという。オリンピックと言えば、関東圏では名の知れた系列店だ。自分と妻を比較するといっそう惨めになった。

健治は智美の来院予定をチェックした。その日に使う薬は鍵の掛っている戸棚に保管してある。通常、医師しか鍵を持ってないが、医院長の信頼の厚い健治は合鍵のある場所を知っていた。瓶には各患者の名前が書いてある。事前に担当医の指示のもと薬剤師が調剤したものである。智美に使う薬の瓶をすり替えた。その瓶の薬はシワ取りに使う、ヒアルロン酸に混合する生理食塩水の量を大幅に減らして通常の濃度の五倍にしたものだった。



美容整形クリニックを訪れ、治療を受けた智美は数日して顔全体がこわばっているような感じを持った。部下からも言われた。

「店長、最近、表情が硬いですね。笑い顔も見せないし、何か心配事でもあるのですか」

智美は鏡に向かって作り笑いをしてみるが表情がほとんど変わらない。てっきり、美容整形クリニックの治療の所為だと思って、美容整形クリニックの幸田に訊いてみた。

「個人差がありますからね。表情の豊かな人など薬が効き過ぎて、笑いが消えることもあります。でも心配しないでください。この薬の効果は数ヶ月しか続きませんから。薬が合わないのかもしれないですね。それにシワが全くにというのも逆に不自然ですよ。天現寺さんのお顔、肌には張りがありまだまだ薬を使うまでもないと思いますよ」

なかなか、良心的な医師である。智美はもう美容整形クリニックの利用はよそうと考えた。そして、鏡で改めて自分の顔をじっくり見て、「親にももらった顔が一番だわ。大切にしなくちゃ」と思うのであった。智美はやはり、そのままの自分の顔が一番好きだった。

了(7783字)